

## 第一術者の暑熱環境から考えるカテーテル室の空調管理 術中環境最適化への取り組み

<sup>1</sup>南東北グループ 健貢会 総合東京病院、<sup>2</sup>南東北グループ 健貢会 総合東京病院  
中曽根 由季<sup>1</sup>、滝村 英幸<sup>2</sup>、中野 雅嗣<sup>2</sup>

【背景】血管内治療（EVT）では、第一術者は鉛防護衣および通気性の低い清潔ガウンを着用するため、衣服内に熱や湿気がこもりやすい。一方、カテーテル室は医療機器や清潔環境維持のため低温管理されることが多く、術者と術野外スタッフで温熱環境に差が生じる。しかし、術者の暑熱環境を客観的に評価した報告は少ない。【目的】EVT 施行時の第一術者のガウン内温湿度を測定し、カテーテル室環境との関連および小型携帯扇風機の有用性を検討した。【方法】第一術者1名を対象とし、鉛防護衣・清潔ガウン内に小型温湿度計を装着した。室温は原則19℃とし、術前から止血時までガウン内温湿度を連続測定した。同時に室内温湿度、手技時間、症例順、空調設定変更の有無を記録し、携帯扇風機装着時と未装着時を比較した。【結果】ガウン内温湿度は手技開始後から上昇し、長時間・連続症例でより顕著であった。一方、室温は概ね19～20℃で推移した。術野外スタッフでは寒冷感を訴える場面も認めた。携帯扇風機装着時は未装着時と比較してガウン内温湿度の上昇が抑制される傾向を認めた。【結語】第一術者のガウン内温湿度の可視化は、カテーテル室の空調管理を検討する有用な指標となる可能性がある。また、小型携帯扇風機は室温を変更せずに術者の暑熱環境を改善し、術者のパフォーマンス維持と術野外スタッフの快適性の両立に寄与する可能性が示唆された。